

IV 特別寄稿

二、三の所感

河村 武

私は本年3月末に筑波大学を定年退官した。環境科学研究科が創設された1977年4月に、専任教授として着任してから16年過ぎた。創設期の試行錯誤の苦勞と、新しい研究科の創造と発展を目指した情熱を体験した教員や技官も少なくなり、世代交替が進んでいる今日、二、三の所感を述べさせていただきたい。

当研究科の設立は、環境の70年代と言われた時代の申し子と言える。わが国では、高度経済成長の歪みとして公害問題が即、環境問題と考えられた時代で、大学の研究科や学科の名称に環境を冠した組織が50以上もできた。その中で当研究科の特色は、高度の職業人を養成する大学院修士課程の研究科で、1専攻で多くの学生定員をかかえること、講義は自然環境から人文・社会環境まで幅広い領域をカバーするという、他に類例のないものであった。

この当初からの理念を具体化するために、今日まで、いろいろな努力がなされて現在のカリキュラムが作られ、落ち着くところへ落ち着いたと言ってよいだろう。80年代の後半から公害問題に代わって、地球規模の環境問題が重視され、第二の環境ブームが生まれたことは周知のとおりである。このような状況の変化に対応して、カリキュラムの内容も変えなければならない。この努力は今後とも続ける必要がある。

筆者が経験した研究科の学生の教育のあり方についての問題の中で、常に考えさせられた事は、環境問題全般にわたる基礎的な知識の習得と、特定の専門分野についての大学院修士課程終了者としての能力の養成である。修士課程の2年間の短期間に、この二つを満たすことは、容易ではないが、今後、担当教員の世代が変わっても、忘れないようにお願いしたい。

この16年の間に、研究科を取り巻く周辺の状況はかなり大きく変化した。当初、環境科学は科学ではないなど、いろいろ批判があった。これに対して、環境科学の学会を作る運動が当研究科をはじめ、いろいろな大学・研究所の有志・関係者の努力が続けられ、最近、環境科学学会が設立された。この学会設立運営には、当研究科の先生方の尽力が大きい。今後の発展のために関係者の学会への入会と学会運営への御協力をお願いしたい。

これとともに、環境科学の博士課程研究科の設立が、早くから要望されながら、筑波大学では、今だに実現しない。これには、筑波大学の組織上の問題(修士課程・博士課程の研究科の役割、学系対応の問題)なども絡んで容易ではないが、環境科学研究の後継者養成や修士課程在学者の研究指導・教育等に広くかかわる問題として、早急に実現をはかる必要がある。今日まで何回か話題になりながら実現できなかった事について、関係者の一人として非力をお詫びするとともに、お願いを申し上げたい。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず(孟子)という名言の中に問題解決の鍵があると思われる。

私の一期一会

河村 武

今から30年以上前、日本気象学会の大会が北海道大学で開かれたときのことである。私が札幌管区気象台に勤務するようになって、日が浅かったが、地元であるため、予報当番に当たっていない時は、大会の運営の下働きで忙しく動きまわっていた。そして自分自身の研究発表も何とか無事に済ませて、ほっとして退席しようとしたとき、発表会場の最前列の右端に座っておられた中谷宇吉郎先生に呼びとめられ、「あとで私の研究室に来なさい。」と言われた。

周知のとおり、中谷先生は雪の研究で世界中に知られた気象学者で、当時も北大教授であられたが、体調を崩されて、大学にはほとんど出ておられなかった。そのようなわけで先生に声をかけていただいたのは、これがはじめてであった。思いあたるふしもないし、大会の世話に手落ちがあるのかな、などと不安な気持ちで先生の研究室に伺った。

先生は研究発表会場とは違った笑顔で、「君の発表を聞いていたが、素晴らしい研究をしたね。今晚自宅に帰ったら、すぐ論文を書きなさい。とにかく自分自身の印象が薄れないうちに学会誌に投稿しなさい。そうすれば、きっと、さきで君自身がよかったと思うよ。」と励まして下さった。

自分自身でそれほど価値のある研究だと思っていただけに、初対面の大先生からお褒めの言葉をいただいたのが嬉しくて、怠け者で容易に論文を書かなかった私には珍しく2週間後には論文を投稿した。中谷先生はこの学会に出席されたのが最後で、後は自宅で療養されたが、翌春亡くなられた。したがって、その後お目にかかってお礼を申し上げる機会はなかった。

後になって、この論文を読み返して見ると中谷先生が褒めて下さったほど、よい論文であるとは思えないが、その後の私のライフワークの一つとなった局地気候の研究の出発点となったことは確かである。それから20年近くたって、局地気候の解析に関する研究で、岡田武松先生を記念した岡田賞を受賞したとき、改めて、中谷先生の一言を思い出して、私にとって、かけがえのない一期一会であったことに気がついた。

近年になって、中谷先生の直弟子の方々にこの話をしたところ、中谷先生は将来成長する見込みのあると思われる若い研究者を見つけると、このように励まされたとのことである。

いささか私事にわたり自慢めいた話になったことを御容赦いただきたい。私には中谷先生のような役割を演じることは、とうてい不可能であるが、環境科学会誌をはじめ、多くの関係学会誌の投稿論文数は、必ずしも充分ではないと聞く。諸先生方が身近な若い研究者、あるいは研究者の卵達に、研究論文をためらわずに書いて、学会誌に投稿するよう、温かい励ましの言葉をかけていただければ幸いである。